

通信

No.62

2017年 冬号

発行：子育てサポートくるみ

住所：羽曳野市壺井 508-1 TEL：072-957-3282

FAX：072-958-4089 HP：<http://kosodate-kurumi.com>

多くのひとに支えられて

くるみが壺井の地に移り 27 年となりました。自然が豊かで、子どもたちがのびのびと遊び生活する場に最高なところがここだと、当時斉藤公子さんと宇山さん（前園長）が探し、選んだ場所です。園の周りの環境は、年月が過ぎても大きな変化はなく、近くの野山を遊び場に子どもたちは育っていています。園の歴史は 47 年を過ぎ、巣立っていった子どもたちは 200 名を超えています。子どもは赤ちゃんから学童 6 年生まで在籍すると 12 年間在籍します。6 人の子どもを 24 年間くるみで子育てした方もいました。そして、今は卒園した子たちが親となり、くるみに帰ってきています。この地に園舎を建設するために頑張った親たちは、今は祖父母として会をつくり、伝承遊びや文化活動で子どもたちと関わり支えてくれています。

認可外保育園の運営は荒波を航海していくような感じで、皆で力を合わせて舵をとり、乗り越えて今があります。大波が少しずつ小さくなってはきていますが、安定させるには認可保育園にしようとして行政に働きかけています。

今年子育てサポートくるみを支える基盤をしっかりとするために後援会を発足し、今後広く支援の輪を広げていく予定です。第 1 回目の後援会行事として 9 月 2 日に夏祭りを行いました。くるみに関わりのあった方々に案内を送り、夏祭りに来られない方は寄付を送って応援してくれました。祭りには、親たち・学童・祖父母・他団体（ふたかみ福祉会、藤井寺学童、和田萬商店）がお店を出し、賑やかな一日となりました。また、卒園児たちも来てくれて、くるみで育った頃の思い出話に花が咲きました。自分たちが育った頃とほとんど変わっていない様子に、懐かしさと安心感を覚えているようでした。「乳幼児期の遊びまわって楽しかった体験がその後の人生を支えていく」と言われます。子育てサポートくるみは、子ども時代の育ちをしっかりと保障する保育園としてこれからも活動し続けます。後援会ができたことは何よりも心強い限りです。地域の方々とも連携し、頼られる存在として根付いていくために、認可を取得できるよう進んでいきます。

園長 山田 房江

沖縄平和学習へ

学童の5・6年生が8月17日から4泊5日で沖縄に平和を学びに行きました。

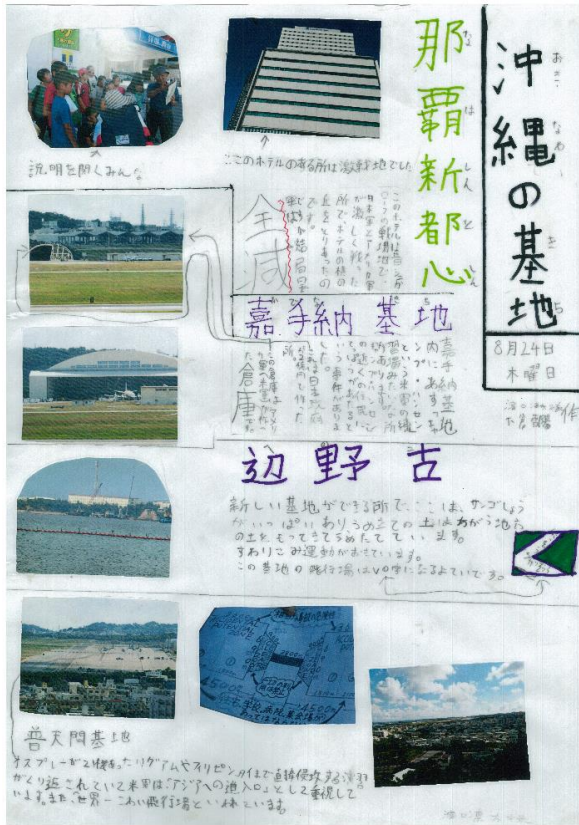
平和ガイドの方に案内していただきながら、沖縄平和祈念資料館やひめゆりの塔、アブチラガマをはじめとした戦争の跡を巡って学習をしました。ガマでは、中に入ってすべての明かりを消した実際の暗さを体験し、当時ガマに隠れていた方の話をテープで聞かせてもらいました。

また、普天間や嘉手納などの基地や移設問題で揺れる辺野古にも実際近くまで行き、沖縄の現状も学んできました。丸二日間、長い時間でしたが、子どもたちも真剣に話を聞く姿がありました。

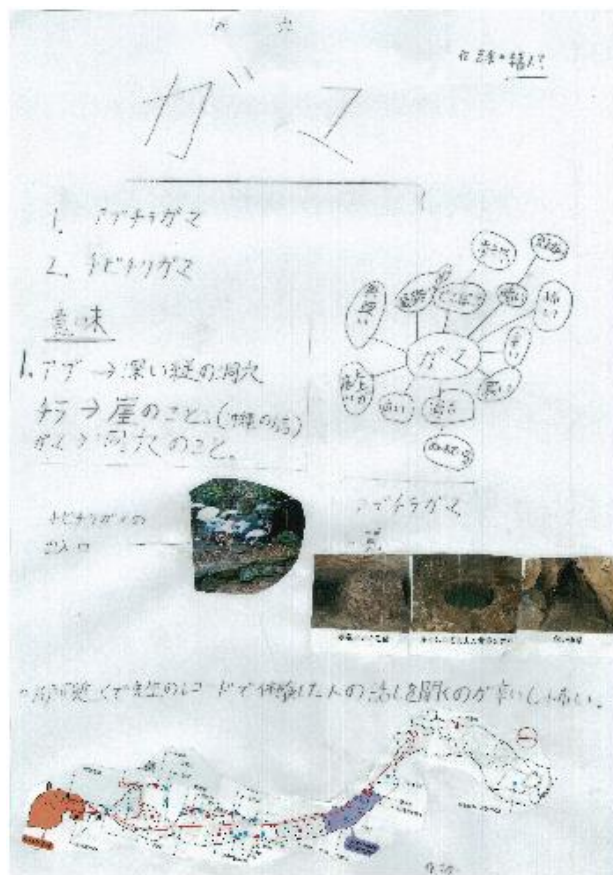
学習の前後には、海でシーカヤックやシュノーケリング体験をしたり、美ら海水族館や沖縄料理を楽しんだりしました。帰ってから子どもたちと相談して学んだことをみんなに伝えるために新聞を作りました。



[沖縄平和学習：ひめゆりの塔や資料館に関する新聞]



[沖縄平和学習：基地に関する新聞]



[沖縄平和学習：ガマについてまとめた新聞]



[沖縄平和学習：美ら海新聞]



[沖縄平和学習：うまいぞ沖縄新聞]

保育士・保護者の声

○ 沖縄平和学習に参加して（住田 麻美）

この夏、5・6年生の沖縄平和学習に参加しました。

大人と子ども、あわせて19人の大所帯で、ガイドの与儀先生に案内していただき、いくつかの資料館、ガマ、米軍基地などをまわり、学習してきました。

普天間基地では、軍用機が並ぶ滑走路のすぐ近くに、住宅・学校・保育園などがありました。騒音や度々起こる墜落事故など、危険と隣り合わせの生活を我慢し続けている住民の苦しみはどれほどかと思えます。自然豊かに珊瑚礁や魚が住む名護市辺野古の海で、新基地建設がすすめられている様子も見ました。実際に基地を見て話を聴くと、様々な問題を抱えていて衝撃が大きかったです。沖縄に暮らす人々だけの怒りや悲しみであってはいけない。日本の問題として、私たち一人一人が向き合い、考えなくてはと思いました。

南城市にあるアブチラガマに入り、野戦病院として使用されていた当時の話を聴きました。一時は600人以上の負傷兵が運び込まれ、その看護にあたったのは女学生達。飲まず食わずで手当てや、切断された手足、死体の片付けに休みなく働かされる。撤退時、重症の動けない人達は青酸カリを渡され、置き去りになった・・・話を聴き、自分がいる場所でそんなことがあったんだ、とその情景を思うと「戦争があった」ことが現実として迫ってくるような感じがしました。

糸満市の平和記念公園周辺は沖縄戦の最後の激戦地となった場所です。多くの住民が戦火に巻き込まれ、青い海も当時は血で赤く染まったそうです。資料館の証言集は戦争を体験した人々の真実の言葉で、恐怖や残酷さが生々しく伝わってきました。夢中で読んでみると、72年前のことと思えないような感覚になりました。口にしたくもない悲惨な記憶を、私たち後生へと伝えて下さる勇気を本当にありがたいと思いました。

2日間、様々なところを訪れ、とても勉強になりました。沖縄戦の爪跡が現在も変わらない形で残されていて、72年経った今も沖縄の人々は大きな悲しみと戦争に対する強い思いと共に生きていると思えました。知ることができてよかったです。子ども達にとっては受け止めきれないことや、難しいことも多くあったと思います。息子と振りかえって話をしますが、



[平和学習：地図を前にお話を伺う]

しばらくたった今もガマの事などは「こわくて話したくない。」と言います。でも、仲間と共に、自分の目で見てきたことは、子どもたちそれぞれの心に残っていくと思います。与儀先生が『何でもよく勉強して、よく知って、幅広い知識を身につけて、自分の考えをしっかりと持つことが大事。』と子ども達に伝えてくださいました。「戦争は絶対にいけない」という思いを強く持ち、平和を守る努力を繋いでいきたいと思います。

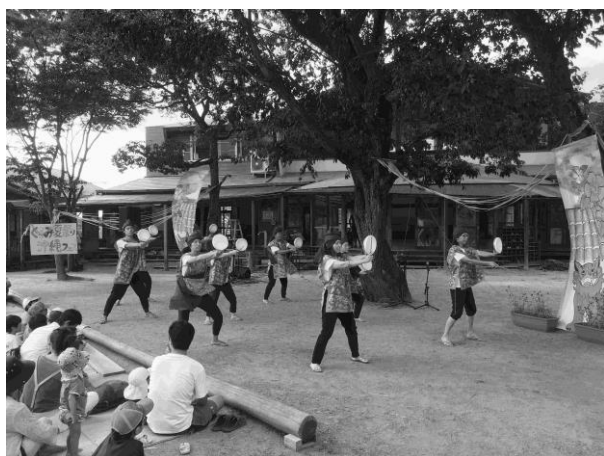
○ くるみ夏祭りの感想 （橋本 友輝）

当日は天気が良く、夏祭り日和な日でした。その日を心待ちにしていた、私と子どもたち。お昼寝から飛び起き、張り切って浴衣に着替えていました。お祭り会場では初めて食べる冷しぜんざいに大喜び。上の子は、おやつがサーターアンダギーだったので、「足りない」と嘆いていました。

私の中で特に印象的だったことは、学童さんの射的でした。その日は風が強く、的の紙コップが次々と崩れてしまい、起こしても倒れ、起こしても倒れ…の中、待っている子どもたちに「ちょっと待っててね」と優しく対応してくれる姿がありました。去年の夏祭り（学童主催）でも同じように思いましたが、小さい子への優しさ・心遣いなど普段の姿とはまた違う、一面が見られ嬉しく思います。

青空に三線が響くなか、舞台はゆったりとした時間、まさにウチナータイムを感じることが出来ました。初めて目の前で見た「エイサー」。会場全員で一体感の生まれた「カチャーシー」。ただ、これから動こうかという姿の方も見られたので、アンコールであと一周出来たらもっと盛り上がったのではと、少し感じました。

いつもは職員の立場ですが、この日は母と子で「親子で参加」になり、私自身もゆっくりと見て回ることができ、楽しめました。企画をする方、携わる方は大変だとは思いますが、今後も楽しみにしています。



[夏祭り：エイサー]



[夏祭り：学童によるお楽しみも]